

各地で話題の病害虫

ダイズうどんこ病

学名: *Oidium* sp.

1998年、大分県竹田市や大野郡三重町のダイズ（品種：越前みどり枝豆、在来青豆など）ほ場で、うどんこ病と思われる病害が多発生した。大分県農業技術センターで調査した結果、病原菌は *Erysiphe polygoni* 型の *Oidium* sp. と同定された。本菌によるダイズのうどんこ病は、わが国では



大分県病害虫防除所・大分県農業技術センター提供

1982年に東京大学農学部ほ場で発生した例はあるが、一般ほ場で発生が確認されたのはこれが初めてである。

ダイズでの病徴は、葉の表裏に直径約3～7mmの白色粉状の斑点を生じ、後に斑点が融合して葉全体が白色粉状物で覆われる。病斑部は古くなると白色粉状物が消失し淡褐色の痕跡となり、激しい場合には早期に落葉する。本病は、病斑上に形成された分生子が伝染源となり、風などで飛散しまん延する。晴天が続く、日温度較差が大きいような条件下で発生が助長されると考えられているが、発生生態の詳細はまだ明らかになっていない。

同センターでの接種試験で、供試したダイズ43品種中、在来青豆等7品種にだけ発病が認められているように、本病の発生は品種間で明らかに差があることから、防除対策としては本病に強いアキシロメ等の品種を選定することが有効である。

トマト黄化萎縮病

ウイルス名: Tobacco leaf curl virus (TLCV)

1998年7月、高知県越知町などで施設栽培トマトの頂葉が黄化萎縮し、わき芽が萎縮する症状が確認された。九州農業試験場で行われた調査の結果、本病は高知県では未記録のトマト黄化萎縮病であることが明らかにされた。

トマトの病徴は頂葉が黄化し、葉が下方に巻く、



高知県病害虫防除所 高橋尚之氏提供

その後葉脈間の黄化、縮葉などの症状を示し、さらに進むと葉はちりめん状となり、節間が短縮して萎縮症状を示す。生育初期に感染すると、叢生症状となり、著しい生育不良になる。発病前に着果した果実は正常に発育するが、発病後の花は結実しないことが多い。

本病は1973年に奈良県でトマトに初めて認められ、その後、大阪府等でも確認されている。

本ウイルスはタバココナジラミ *Bemisia tabaci* (Gennadius) によって媒介される。シルバーリーフコナジラミ *B. argentifolii* Bellows & Perring による媒介は報告されていない。

防除は、タバココナジラミの寄主であるスイカズラを除去し、発病株を抜き取る。また、ピリダベン水和剤、ピリプロキシフェン乳剤等を散布し媒介虫の密度を下げるとともに、寒冷紗などでほ場への侵入を防ぐ。

ハウレンソウケナガコナダニ

学名: *Tyrophagus similis* Volgin

昨年4月、富山県内のハウス栽培ハウレンソウにダニ類の被害が発生しているのが確認され、同定の結果、ハウレンソウケナガコナダニであることが確認された。本種は北海道から本州にかけてハウレンソウでは普通に発生するコナダニであるが、これまで富山県では発生が確認されていなかった。北海道などではキュウリ、メロン、スイカ等でも被害が出ており、いずれも稚苗期から幼苗期にかけて加害されている。



富山県新川農業改良普及センター 村崎信明氏提供

成虫の胴長は0.3~0.7mmと非常に小さく、体色は乳白色で半透明である。

ハウレンソウでの被害は、新芽及び新葉部に多く発生し、中心の葉に小孔があく。展開葉ではこぶ状の小突起が生じ、光沢を帯びて縮葉し、奇形となる。加害の激しい株では、中心の葉は芯止まりとなる。また、土壌中の密度が高くなると播種した種子も加害し、発芽障害が起きる。本種の発生は、低温期のハウスの無加温栽培で多く、露地栽培及び夏期での発生は少ない。

防除対策としては、収穫残渣が発生源となるため、発生ほ場ではこれらを除去し、次作の播種前にDCIP粒剤を土壌混和するか、太陽熱による土壌消毒を行う。また、初期防除が重要なため、本種を発見した場合、直ちにDDVP乳剤を散布する。

ブタクサハムシ

学名: *Ophraella communis* Le Sage

ブタクサハムシは近年花粉症の一因とされる帰化雑草のブタクサを摂食することで注目されているが、1998年8月に東京の西多摩地区のほ場でヒマワリを食害しているのが確認された。

成虫の体長は3.7~4.7mm、体幅は体長の1/2程度、体色は淡黄褐色~黄褐色で、多くの個体で上翅に黒色の4縦条があり、日本の既知種とは容易に区別できる。多化性で成虫で越冬する。3齢幼虫は7~8mmのやや平たい円筒状で、体色は灰黄色であ



東京都病害虫防除所 竹内浩二氏提供

る。卵は葉裏に20~50個程度まとめて産卵される。

本種は北米で知られており、日本では1996年に神奈川、千葉、東京で確認された。その後1997年には、関東全域と山梨、大阪で、1998年には京都、滋賀、兵庫、奈良、和歌山で確認された。

寄主植物としてブタクサ、オオブタクサ、ヒマワリ、キクイモ、オオオナモミ等が確認されている。

ヒマワリの被害は成虫、幼虫による葉への食害で、矮性タイプや従来の高性一本立ちタイプのいずれでも確認されている。夏から秋にかけて多発することがあり、激しく食害されると葉脈だけが残る。

本種は分布を拡大中で、またヒマワリ以外の新たな有用植物に寄主を広げる可能性もあることから、発生動向について注意が必要である。